

「化身土卷」における信仰批判の課題

——『観経疏』『散善義』の文を手がかりとして——

伊 東 恵 深

はじめに

本稿の目的は、親鸞が『教行信証』『化身土卷』に引用した『観経疏』『散善義』の文を通して、「化身土卷」における信仰（信心）批判の課題について考察することである。

この善導の文は、『大経』と『観経』の三心の一異、および、『大経』と『観経』の三心と『小経』の一心との一異を問う自釈の後に位置しており、直接には、その問答中に説かれる顕彰隱密の義を明証する釈文として引用されている。この文は、「散善義」の「三心釈」——「至誠心釈」「深心釈」「回向発願心釈」からそれぞれ引用され、「乃至」によって切り結ばれている。そして、その「乃至」された文は、二、三の重複箇所はあるものの、真実信を証明する論拠として「信巻」に引用されている。

以上の対応関係から、「散善義」の文は衆生の信心を明らかにする証文として、「化身土卷」と「信巻」に分けて配置

されているとすることができよう。そこで、これらの引文の意味内容や前後の文脈との関係を尋ねることによって、親鸞が「化身土卷」で論じる衆生の信心の問題について考究してみたい。

一、至誠心釈

また真実に二種あり。一には自利真実、二には利他真実なり。自利真実と言うは、また二種あり。一には真実心の中に自他の諸悪および穢国等を制作して、行住座臥に一切菩薩の諸悪を制捨するに同じく、我もまたかくのごとくせんと想うなり。二には真実心の中に、自他凡聖等の善を懃修す。真実心の中の口業に、彼の阿彌陀仏および依正二報を讃嘆す。また真実心の中の口業に、三界六道等の自他依正の二報苦患の事を毀厭す。また一切衆生の三業所為の善を讃嘆す。もし善業にあらずは、敬んでこれを遠ざかれ、また随喜せざれとなり。また真実心の中の身業に、合掌し礼敬し、四事等をもって、彼の阿彌陀仏および依正二報を供養す。また真実心の中の身業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭

捨す。また真実心の中の意業に、彼の阿弥陀仏および依正二報を思想し観察し憶念して、目の前に現れるがごとくす。また真実心の中の意業に、この生死三界等の自他の依正二報を軽賤し厭捨すと。

〔定親全〕一、二八〇・二八一頁

この「化身土卷」に引用された文は、衆生の自利の真実について定義している。一つには、真実心をもって、菩薩達のように自他の諸々の悪および穢れた世界への執着を廃捨しようとする願うことであり、二つには、真実心をもって、身口意の三業において阿弥陀とその浄土を讃嘆・礼拝・供養・観察・憶念し、逆に三界六道の苦患は厭い捨てることである。

それに対して「信卷」では、「自利真実と言うは」より「輕賤し厭捨す」までを「乃至」して、「また真実に二種あり。一には自利真実、二には利他真実なり」から「不善の三業は、必ず真実心の中に捨てたまえるを須いよ。またもし善の三業を起さば、必ず真実心の中に作したまいしを須いて、内外明闇を簡ばず、みな真実を須いるがゆえに至誠心と名づく」を、一連の文脈として読ませるように配置されている。^①この親鸞の意図を『愚禿鈔』によって確かめてみることにしよう。

『愚禿鈔』下巻では、「信卷」同様、「また真実に二種あり。

一には自利真実、二には利他真実なり」の文を引用し、その後「散善義」の本文にはない「利他真実について、また二種あり^②」という語を書き入れ、続いて、

一には、「おおよそ施したまうところ趣求をなすは、またみな真実なり」と。

二には、「不善の三業は必ず真実心の中に捨てたまいしを須いよ。またもし善の三業を起さば必ず真実心の中に作したまいしを須いて、内外明闇を簡ばず、みな真実を須いるがゆえに、至誠心と名づく」と。

〔定親全〕二、二二二頁

の文を引用している。これによって、「不善の三業」以下の文は「利他真実」の内実とされていることが分かる。

従来、「不善の三業をば、必ず真実心中に捨つべし」「必ず真実心中に作すべく」^③と訓まれてきた文を、親鸞は「信卷」で「不善の三業は、必ず真実心の中に捨てたまえるを須いよ」「必ず真実心の中に作したまいしを須いて」と訓んでいる。これによって、真実心とは衆生自身が發起する心ではなく、如来の清浄願心が衆生に現前するところの心（真信心）であると了解されていることが分かる。したがって「自利真実」といっても、それはどこまでも衆生の自力の執心（努力意識）にほかならないことが示されているのである。

二、深心積

「深心積」は、『大経』と『観経』の三心の一異、および、『大経』と『観経』の三心と『小経』の一心との一異を問う自釈の後の二箇所にそれぞれ引用されている。ここで注目したい

のは、両者の引用に重複箇所が見られないということである。

これらの引文によれば、『大経』と『観経』の三心の一異を問う自釈の後には、往生の正因としての行の簡びが中心に論じられているのに対して、『大経』と『観経』の三心と『小経』の一心との一異を問う自釈の後では、釈迦・諸仏の称名念仏の勧めが中心に位置づけられている。このことは、「就人立信」の文は後者に、「就行立信」の文は前者に完全に分けて引用されていることから窺うことができる。

この引用の相違から、『大経』と『観経』の三心の一異を問う箇所では、自力を頼みとして修行することの問題性が、『大経』と『観経』の三心と『小経』の一心との一異を問う箇所では、信仰の根拠を他者に委ねることの問題性が、それぞれ問われているのではないだろうか。

三、回向発願・心釈

三には回向発願心。回向発願心と言うは、過去および今生の身口意業に修する所の世・出世の善根、および他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世・出世の善根を随喜して、この自他所修の善根をもって、ことごとくみな真実の深信の心の中に回向して、彼の国に生まれんと願ず。かるがゆえに回向発願心と名づくるなり、と。

（『定親全』一、二八二頁）

右は「化身土巻」の引文である。ここでは、回向発願心と

「化身土巻」における信仰批判の課題（伊 東）

は衆生の身口意の三業において修めた善根をもって、阿弥陀の浄土に往生したいと願うことであると定義されている。すなわち、自力の善根を積んで、それを差し向けることによって浄土に往生しようと願う、行者の努力意識（自力執心）として読むことができる。

「信巻」ではこの部分は「乃至」され、「また回向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心の中に回向したまえる願を須いて得生の想をなせ」以降の文が引用される。^⑥ここでも「至誠心釈」の引用同様、一般的に「必ず須く決定真実心中に回向し願じて得生の想を作すべし」と訓まれてきたのを、「必ず決定して真実心の中に回向したまえる願を須いて」と訓むことによって、回向の主体を阿弥陀に転換して、〈阿弥陀如来が真実心の中に回向された本願をもちいることによって往生せよ〉と了解されている。つまり往生の根拠が、衆生の努力や強固な信念などではなく、如来より回向された発願心であるからこそ、破壊されたり退転したりすることがないと言うのである。ここに、自力をもって浄土への往生を願うことの虚実性が明白にされるのであろう。

おわりに

本願文の第十八・第十九・第二十願は、我々衆生に「十方衆生よ」と喚びかけ、衆生の救済を願われている。しかしそ

「化身土巻」における信仰批判の課題（伊 東）

の衆生には、自身の力を頼む心（自力執心）が潜んでいたのである。

「化身土巻」引用の『観経疏』『散善義』の文は、このような自己の信仰心の不純粹性を徹底して教示しているのである。

【凡例】

- 一、引用文中の漢字は現行の通行体に改め、書き下した。
- 二、出典の略記は以下の通りである。

『定親全』――『定本親鸞聖人全集』（法蔵館）

- 1 『定親全』一、一〇三頁参照
- 2 同右、二、二二頁
- 3 『浄土宗全書』二、五六頁
- 4 『定親全』一、二八一・二八二頁参照
- 5 同右、二九八・二九九頁参照
- 6 同右、一〇六・一〇七頁参照
- 7 『浄土宗全書』二、五九頁

〈キーワード〉 親鸞、化身土巻、散善義、信仰批判

（親鸞仏教センター研究員）

新刊紹介

高崎直道・柏木弘雄

『仏性論・大乘起信論（旧・新二訳）』

A五版・三八〇頁・定価二五、〇〇〇円

春秋社・二〇〇五年九月

states:

The person who lives true shinjin, however, abides in the stage of the truly settled, for he has already been grasped, never to be abandoned. There is no need to wait in anticipation for the moment of death, no need to rely on Amida's coming. At the time shinjin becomes settled, birth too becomes settled (*Letters of Shinran*, Hongwanji International Center, 1978: 20)

Shinran emphasizes that there is no need to rely on Amida's coming at the moment of death. In this passage we can find that Shinran made clear the truth of salvation in the present life. This change of salvation's time — from the moment of death to the present life — is Shinran's idea of the change of time.

39. The Criticism of Faith in the Chapter on the Transformed Buddha-Bodies and Lands: With reference to the Chapter of Non-Meditative Practice in the *Commentary on the Contemplation Sūtra*

Eshin Itō

This essay intends to discuss the subject of the criticism of faith through Shan-tao's treatment in the "Chapter of Non-meditative Practice" which Shinran quoted in the "Chapter of the Transformed Buddha-Bodies and Lands" of the *Kyōgyōshinshō*. Hereby, I want to investigate the characteristic or the difference of faith of all creatures that Shinran clarified in the "Chapter of the Transformed Buddha-Bodies and Lands."

40. On Compassion in the Fourth Passage of the *Tannishō*

Toshiaki MIHARU

The Japanese phrase, *Kono jihi shijūnashi* in the fourth passage of the *Tannishō*, has been understood to mean that our compassion is not through-going. But in my opinion it means that it is endless. *Tannishō* collects Shinran's sayings. By reading this book, we understand that Shinran is a man of compassion.